

問題基盤型学習 (PBL) を用いたテュートリアル教育における教育効果<第四報>

新潟医療福祉大学 健康科学部 看護学科 高橋直樹
阿部明美
栗原弥生
松井由美子

【背景】

PBL (Problem - Based Learning) を用いたテュートリアル教育における主体的学習能力と対人関係技能 (社会的スキル尺度) との関連における一連の研究報告について、第一報 (阿部ら, 2009), 第二報 (栗原ら, 2009), 第三報 (松井ら, 2009) は、主に1年生と2年生の学年別もしくは学年間の比較に関する分析を中心とした報告だが、本稿では、1年生と2年生を包括した男女比較や大学入学前のグループ学習経験の有無の比較について報告する。

【方法】

4年生看護系大学の1年生88名と2年生87名のそれぞれの小グループによる課題解決方式の授業1課題終了後、Laudouceurら(2004)の3つのサブスケール(自己学習技術10問, 批判的思考技術9問, グループ学習技術12問)からなる学習評価スケール31項目(6段階リッカート式), および, 社会的スキルKiSS-18(菊池, 1988)18項目(5段階リッカート式)と基本属性(性別, 年齢, 本学入学前のグループ学習経験の有無)について調査したデータを分析する。

なお, データの回収率については, 1年生で68(回収率77.3%), 2年生で87(回収率100%)であり, 本研究において分析対象となる有効回答数は, 1年生で64(男子8, 女子54, 無記入2), 2年生で77(男子13, 女子64)であった。

【倫理的配慮】

学生に, 本研究の目的・方法・データの匿名性, および, 研究への参加は自由意思であり, 拒否しても授業評価には影響しないことを説明した文書を, 調査票とともに配布し, 同意の得られた学生に調査票を提出してもらった。

【結果】

1年生と2年生の比較に関する第三報(松井ら, 2009)では, 学習評価スケール31項目の合計点とサブスケールごとの得点, および, KiSS-18得点の全てにおいて, 学年間の有意差はみられなかった。そこで, 男子と女子を分けて, t 検定により, 男性のみの学年間比較, また, 女子のみの学年間比較をおこなったが, 両方とも有意差はみられなかった。さらに, 大学入学前のグループ学習経験の有無についても分類し(有り43, 無し94, 無記入4), t 検定により, 有りと回答した学生のみでの学年間比較, また, 無しと回答した学生のみでの学年間比較をおこなったが, 両方とも有意差はみられなかった。これらの結果から, 学年間の差はみられないため, 2学年を混合し, 学習評価スケール31項目の合計点とサブス

ケールごとの得点, および, KiSS-18得点について, 性別と大学入学前でのグループ学習の有無の比較をおこなうことにした。その結果, 性別では, グループ学習技術について有意差($t = 2.028, p < .05$)がみられ, 女子の方が男子よりも有意に高かった(図1)。また, 大学入学前のグループ学習経験の有無では, KiSS-18得点について有意差($t = 3.586, p < .01$)がみられ, 有りと回答した学生の方が無しと回答した学生よりも有意に高かった(図2)。

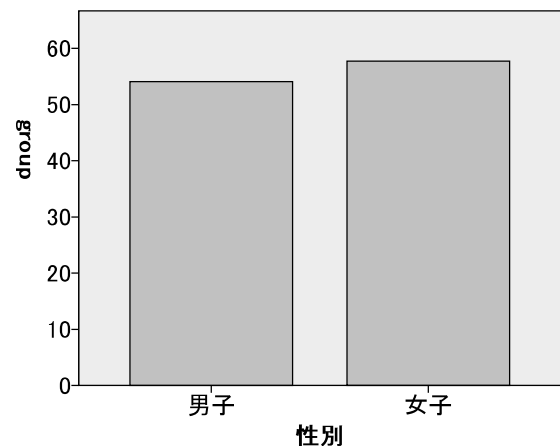


図1 男女別のグループ学習技術の得点 (得点範囲は12 - 72)

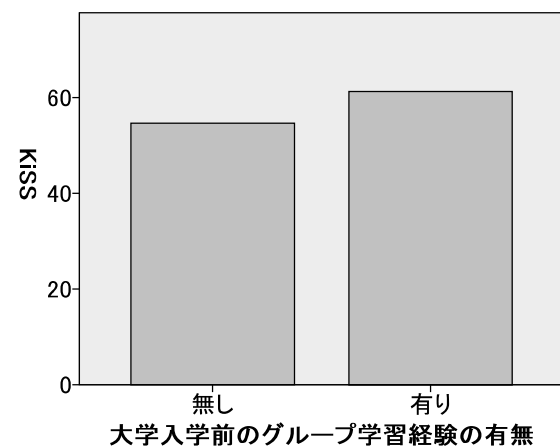


図2 大学入学前のグループ学習経験の有無別のKiSS得点 (得点範囲は18 - 90)

【考察】

今回の分析結果から, PBLを用いたテュートリアル教育における教育効果には, 性別や大学入学前のグループ学習経験の有無によって差があることが示唆された。しかし, これらはPBLを用いたテュートリアル教育の前後比較によって得られた結果ではないため, 性別や過去のグループ学習経験そのものによる差かもしれない。したがって, 今後は, PBLを用いたテュートリアル教育を導入する前にも同様の調査をおこない, 前後比較をおこなうことによって, より厳密な形で, その教育効果について分析する必要があると思われる。